

1. もしそのささげ物が「和解のいけにえ」の場合、  
牛をささげようとするなら、雄でも雌でも傷のないものを主の前にささげなければならない。
2. その人はささげ物の頭の上に手を置く。  
会見の天幕の入口の所で、これをほふりなさい。  
そして、祭司であるアロンの子らは祭壇の回りにその血を注ぎかけなさい。
3. 次に、その人は和解のいけにえのうちから、  
主への火によるささげ物として、  
その内臓をおおう脂肪と、内臓についている脂肪全部、
4. 二つの腎臓と、それについていて腰のあたりにある脂肪、  
さらに腎臓といっしょに取り除いた肝臓の上の小葉とをささげなさい。
5. そこで、アロンの子らは、  
これを祭壇の上で、火の上のたきぎの上にある全焼のいけにえに載せて、焼いて煙にしなさい。  
これは主へのなだめのかおりの火によるささげ物である。
6. 主への和解のいけにえのためのささげ物が、羊である場合、雄でも雌でも傷のないものをささげなければならない。  
  
7. もしそのささげ物として子羊をささげようとするなら、それを主の前に連れて来る。
8. その人はささげ物の頭の上に手を置く。  
そして、それは会見の天幕の前でほふられる。  
アロンの子らは、その血を祭壇の回りに注ぎかけなさい。
9. その人はその和解のいけにえのうちから、主への火によるささげ物として、その脂肪をささげなさい。  
すなわち背骨に沿って取り除いたあぶら尾全部と、内臓をおおう脂肪と、内臓についている脂肪全部、
10. 二つの腎臓と、それについていて腰のあたりにある脂肪、  
さらに腎臓といっしょに取り除いた肝臓の上の小葉とである。
11. 祭司は祭壇の上でそれを「食物」として、主への火によるささげ物として、焼いて煙にしなさい。  
  
12. もしそのささげ物がやぎであるなら、それを主の前に連れて来る。
13. その人はささげ物の頭の上に手を置く。  
そして、それは会見の天幕の前でほふられる。  
アロンの子らは、その血を祭壇の回りに注ぎかけなさい。
14. その人は、主への火によるささげ物として、  
そのいけにえから内臓をおおっている脂肪と、内臓についている脂肪全部、
15. 二つの腎臓と、それについていて腰のあたりにある脂肪、  
さらに腎臓といっしょに取り除いた肝臓の上の小葉とをささげなさい。
16. 祭司は祭壇の上でそれを「食物」として、火によるささげ物、なだめのかおりとして、焼いて煙にしなさい。  
脂肪は全部、主のものである。
17. あなたがたは脂肪も血もいっさい食べてはならない。  
あなたがたが、どんな場所に住んでも、代々守るべき永遠のおきてはこうである。」

1. もしそのささげ物が「和解のいけにえ」の場合、

Ab'Brəq' ~ymil'v. xbz<~aiw

!Brəq' offering, oblation : term for all kinds of offering: animal, vegetable, articles of gold, silver, etc.

~ymil'v. 完全な、傷のない、安全な、健全な 「平和」 : 完全さ、調和、平安

=食を共にすることに於いて、神と契約の民との交わり的一致と完全さが表現され強化される。

シナイ契約も (出 24:9-11) イスラエルの長老たちと神とが共にあずかる聖なる食事によって制定された。

契約が生まれ出し提供した平安が更新されることを意味した。

xbz< 動物を屠る

牛をささげようとするなら、雄でも雌でも傷のないものを主の前にささげなければならない。

4. 二つの腎臓と、それについて腰のあたりにある脂肪、

さらに腎臓といっしょに取り除いた肝臓の上の小葉とをささげなさい。

(動物の器官がいくつかの薄片で構成されているとき、その一薄片。)

11. 祭司は祭壇の上でそれを「食物」として、主への火によるささげ物として、焼いて煙にしなさい。

`hwyl; hVai ~xl, hxBəM; !hKb; Aryj qhi

priest Hi. 焼いて煙にする

食事についての具体的な記述がないのは、実際の食事が祭司による儀礼の領域外にあったから。

しかし、この食事こそは「犠牲の頂点また中心をなすもの」として犠牲の前提条件

16. 祭司は祭壇の上でそれを「食物」として、火によるささげ物、なだめのかおりとして、焼いて煙にしなさい。

脂肪は全部、主のものである。

`hwyl; bl xel K' xxyl xyrd. hVai ~xl, hxBəM; !hKb; ~ryj qhiw

Hi. 焼いて煙にする

17. あなたがたは脂肪も血もいっさい食べてはならない。

あなたがたが、どんな場所に住んでも、代々守るべき永遠のおきてはこうである。」

`Wkatoal { ~D' l kw' bl xel K'

~kytəwAn l kB. ~kytədd. ~lA[ tQxu

## 説教

3章で説明される「和解のいけにえ =  $\text{Anbrq}' \sim \text{ym}'\text{v}$  シェラミーム・コルパノ」は「平和のささげ物」とも訳され、神と人との完全な平和を味わうものとして規定されています。

この「和解のいけにえ」の最大の特徴は、最も大切な部分とされた脂肪を焼いて神さまに捧げた後に、残りの肉を祭司と奉献者が食べるということです。

奉献者はまずささげ物（牛、羊、やぎ）の頭の上に手を置いて自分の手でそれを屠ります。祭司はその血を祭壇の祭壇の回りに注ぎます。それから奉献者はいけにえを切り分け、そのうち脂肪と腎臓、肝臓の上の小葉（これも脂肪と思われる）とを祭司が祭壇で焼いて煙にすることで神さまにささげます。

この煙にしたささげ物は、神の「食物 =  $\sim \text{Xl}'\text{v}$  レヘム：食物、パン」と呼ばれ（11,16）、あたかも神さまがささげ物のうち最高の部分である脂肪を召し上がっていることが意味されます。そうして、脂肪と腎臓を取り除いた残りの部分のうち、胸とももとは祭司が食べ（7:30-34）、あとはすべて奉献者がささげたその所でその日のうちに食べました（7:15-18）。つまり、わかりやすく言うと、ご馳走である肉を食べながら楽しく宴会したのです。ささげるのが牛の場合には、すき焼きやカルビ焼きにして、羊の場合には、ジンギスカンにして、やぎの場合には、ヤギ鍋（ヒージャー）にして、そうやってみんなで鍋を囲んでおいしく食べたのでした。こうある通りです。

「その所であなたがたは家族の者とともに、あなたがたの神、主の前で祝宴を張り、あなたの神、主が祝福してくださったあなたがたの手のわざを喜び楽しみなさい。」（申命記 12:7）  
このように、「和解のいけにえ」とは、要するに神と人とが共に飲み食いするいけにえの儀式です。神さまが最も最上の部分を食べ、残りの肉を人々が食べて、そうやって神と人とが共に和やかに食事をする、それが「和解のいけにえ」なのでした。

この「和解のいけにえ」は、レビ記 1章から説明されてきた一連のいけにえのクライマックスと言えます。すなわち、「全焼のいけにえ」により罪を贖われた人間は、感謝の告白として「穀物のささげ物」をささげます。そうして、「和解のいけにえ」をささげてそれを食べることで、自分が本当に神さまに罪赦され、受け入れられ、神さまとの和解、平和に入れられ、その祝福に入れられていることを、単に頭だけの観念によるだけでなく、その目で見、鼻でかぎ、手で触れ、舌で味わって体験するのです。すなわち、神さまが自分の罪を贖ってくださったことを味わいます。神さまが自分の罪を寛大に赦してくださったことを味わいます。神さまが自分を受け入れてくださったことを味わいます。

自分を喜んでくださっていることを味わいます。

家族としてくださったことを味わいます。

神さまが自分を祝福してくださっていることを味わうのです。

最高においしい料理を食べながら味わいます。

難しい理屈抜きで、単純においしいと思う人間の本能に訴えて味わいます。

最高においしい料理を味わうことで、神さまの恵みを味わいます。

家族や隣人と共に和やかに鍋を囲んで楽しく宴会することで、

神さまに愛されている喜びを、心から体験して実感するのです。

「和解のいけにえ」の「和解」と訳されている言葉

「 $\sim yml \vee$ シエラミーム」は「完全な、傷のない、安全な、健全な、調和ある、平和な状態」を意味します。

すなわち、かつては神さまに罪を犯して

神さまの怒りとさばきを受けねばならない者であったにもかかわらず、

今はいけにえが自分の身代わりになって神のさばきを残さず受けて

全焼となってくれたことにより神のさばきを免れて神さまとこの上ない平和な調和ある状態にあることを意味します。

そして、この「平和」な状態を意味する最も適切な表現こそ、まさしく食卓を囲む風景と言えます。

私たちは、余程親しい間柄でなければ他人と食事することはありません。

恋人同士とか同じ家族であるとか本当に親しい間柄でなければ共に食事することはないでしょう。

ましてや自分の家に招き入れて食事を振る舞うような間柄は、家族かあるいは家族同然の付き合いとすることができます。

全然知らない赤の他人や憎い敵を自宅に招き入れることはまずありえません。

このように、

**共に食事をする**ということは、家族同然に親しい間柄であり、お互いの間が仲の良い平和な状態にあることを意味します。考えてみれば、神さまに愛されていることを表すのにこれ以上の適切な表現はありません。

ところで、極めて重要な問いがあります。

この宴席の主人は誰になるのでしょうか。

誰がこの祝宴の主人で、誰が客となるのでしょうか。

レビ記三章の記述によると、この祝宴の主人は神さまということになります。

神さまが人間のために祝宴を開いてくださるのです。

奉献者は最初に自分の手を家畜の頭の上に置いて自分の手で屠ります。

この際、殺された家畜はすでに神さまにささげられており、

ささげた人の手を離れ、もはやどの部分も残らず神さまのものとなります。

そうして、神さまは、ささげ物を受け取った上で、そのささげ物をどうすべきか命じられるのです。

まずはその一部を火で焼いてご自分の食物となさいます。

次にさらに一部を祭司に分け与えます。

そうして、最後の残りの部分で、神さまは礼拝者をもてなすのです。

この意味に於いて、「和解のいけにえ」は神さまを代表するものです。

「全焼のいけにえ」はおもに罪を贖っていただく私たち自身を代表するものでした。

いけにえの上に手を置いて

自分の身代わりとして

いけにえを神さまの前に差し出してこれを屠ることで

自分の罪が贖われるという奉献者自身を代表するものでした。

しかし、「和解のいけにえ」にはそれ以上の意味があります。

罪贖われた者がその先どうなるのかというさらに一歩進んだ意味があります。

すなわち、

神さまは、

罪贖われた私たちを

ご自分の家の祝宴に招き、歓迎してもてなし、

私たちを慰め、励まし、喜ばせて、私たちを強めてくださるのです。

その意味で、「和解のいけにえ」はいのちの糧と言うべきものです。

つまり、「いけにえ」にはそういう意味があるのです。

と言うより、そういう意味もあるのです。

私たちが「いけにえ」をささげるといふ時、

私たちが自分の持っているものを神さまにささげる、

すなわち自分が神さまに与える、自分のものが神さまのものになる、ということだけを連想しがちです。

それは確かにそうです。

自分のものを神さまにささげるといふ、そのことがすなわち「いけにえ」をささげることに他ならないからです。

しかし、同時に、このことに注意しなければなりません。

すなわち、私たちが神さまにささげる「いけにえ」が、実は私たちに神さまの恵みをもたらすということです。

「いけにえ」というものは、

私たちのものが神さまのものになって自分の財産が減ってしまうということだけの意味に止まらないのです。

「いけにえ」は同時に私たちに神さまの恵みをもたらすのです。

このことは、「全焼のいけにえ」の場合もそうでした。

身代わりの代償としてささげる「全焼のいけにえ」を通して、ささげる者は「罪の贖い」という神の恵みを受けます。

そして、「和解のいけにえ」では、それをささげた者は、罪贖われた喜びと平安、確信が与えられます。

信仰と肉体が養われるのです。

これはささげた人しか味わうことのできないものです。

「全焼のいけにえ」にしても「和解のいけにえ」にしても、

それをささげた人だけが、罪の贖いの恵みと罪贖われた喜びを味わうことができたのです。

このように、神さまへのささげ物である「いけにえ」は、

それをささげる人間の側を代表するものであると同時に、神の神聖をも代表するものです。

そして、神と人は、この「いけにえ」を通して交わりをします。

とりわけ、「和解のいけにえ」は、神さまが私たちの信仰を励まし強めてくれるものです。

神さまは、「いけにえ」によって私たちのいのちを支えてくださるのです。

神との食事によって、

私たちに振る舞ってくださる食事によって、

「和解のいけにえ」によって、私たちが養い、生かしてくださるのです。

思えば、聖書には、多くの箇所で、神さまがご自分の民を養ってくださることが記されています。

かの詩篇 23 編にはこうあります。

**「私の敵の前で、**

**あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。**

**私の杯は、あふれています。**

**まことに、私のいのちの日の限り、**

**いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。**

**私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。」** 23:5-6

イザヤ書 25 章では、世の終わりに、神さまがとこしえに死を滅ぼされる時、

**「万軍の主は、**

**この山の上で万民のために、**

**あぶらの多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、**

**髓の多いあぶらみとよくこされたぶどう酒の宴会を催される」**（6）とあります。

これを受けて、イエスさまも、世の終わりに於ける「盛大な宴会」について言及されています（ルカ 14:15-24）。

これを「婚姻の祝宴」にも喩えました。

このような話はすべて神さまがご自分の家で私たちが豊かに養ってくださることを言っているものです。

いったい神の家で具体的にはどのように養われるというのでしょうか。

それは旧約のレビ記の律法によると「和解のいけにえ」ということになるでしょう。

神さまが「和解のいけにえ」によってご自分の民を慰め、励まし、その信仰を力づけてくださるのです。

具体的に旧約聖書で「和解のいけにえ」がささげられた例はどこにあるのでしょうか。

例えば、士師記 20:26 で、ベニヤミンを攻撃するイスラエル軍が二度も敗北した際、

悔い改めの意味を込めて、彼らは全員こぞってベテルに登り、そこで泣き、断食をし、全焼のいけにえと共に捧げました。

また、サムエル 11:15 でサウルが王権創設の宣言をした際に、ささげました。

それから、列王 8:63 でソロモンが神殿建設をしそれを奉献した際に（全焼のいけにえ、穀物のささげ物と共に）ささげました。

つまり、喜びの時にせよ、悲しみの時にせよ、いずれにせよ大切な節目の際にささげたのです。

神さまの慰めと励ましを受けて心新たに生きてゆかんとする際に、捧げました。

そして、神さまは、彼らのささげる「和解のいけにえ」によって、彼らを慰め、励まし、力づけたのです。

そして、さらに、

確認しなければならないことがあります、

イエスさまは、以上の事実を踏まえたと、「わたしはいのちのパンだ」と言われました。

「わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物」と言われました。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。

人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。

わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。

わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」と言われました。

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。

生ける父がわたしを遣わし、

わたしが父によって生きているように、

わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。

これは、天から下ってきたパンです。

あなたがたの先祖が食べて死んだようなものではありません。

このパンを食べる者は永遠に生きます。」

イエスキリストこそは、私たちにいのちを与える、生けるまことの「和解のいけにえ」です。

それを食べる物は「生きる」のです。

いのちを与えるまことの糧です。

ご自分が私たち罪人の身代わりになって十字架で死なれ、

その裂かれた肉を人々に振る舞って、

いけにえの身代わりの死の効力を人々にもたらす、

そうやって、人々にいのちを与えるまことの糧です。

それでイエスさまは最後の晩餐の席で「パンを取り、祝福して後、これを裂き、弟子たちに与えて」こう言われました。

**「取って食べなさい。**

**これはわたしのからだです。」**

この生けるまことの「和解のいけにえ」は、私たちに慰め、励まし、

罪贖われたこの身を今日も生かし、力を与えて、私たちの信仰を強めて、救われた喜びで満たしてくださるのです。

共に後に与る主の晩餐を通して、この喜びに与りたいと思います。